太宰治の「十二月八日」と雑誌『婦人公論』をめぐって

李　顯周

はじめに

太宰治の戦時下の文学は、これまで太宰の個人的な事情や戦争という歴史的、時代的状況のレベルで解釈されてきた。しかし一人の作家もしくは作品の研究に取り組む際、作家と作品、そして読者という三者を媒介する雑誌メディアの存在を無視することはできない。特に戦時下という時代状況にあっては、雑誌メディアはたんに作品と読者の媒介という役割以上のものすなわち、国策のプロパガンダというまったく新しい役まわりを担うようになる。

戦時下の太宰文学の特徴として『若草』『婦人公論』『少女の友』『婦人画報』『新女苑』など多様な女性向け雑誌への掲載が頻繁に見られることがあげられる。このような多様な女性向け雑誌との接触は、戦時下の文化状況と密接に結びついて展開していく。本稿では、その中でも『婦人公論』に掲載された「十二月八日」という作品を中心に、戦時下の『婦人公論』の傾向が太宰の創作にいかなる影響を与えていたのかを考察してみたい。

一、「十二月八日」に対する評価の分裂

太宰治は昭和一七年二月『婦人公論』に、短編小説「十二月八日」を発表している。それは太平洋戦争が勃発した一二月八日という日における、ある平凡な主婦の一日を女性独白体で描いた日記形式の小説である。作品の中には伊馬春部や亀井勝一郎、園子という太宰の長女の名前など実名で登場することから太宰の自伝小説とも読み取れる。そしてこの小説の中には、戦争開始を伝える生々しいラジオの音声の描写、戦争に対する平凡な主婦の心構えから表れている日本への信頼・期待感とともに、一方では戦時下の生活難と不安がなにげなく描かれている。

この「十二月八日」に対する主だった先行研究をあげてみると、まず太宰研究の古典とも言われている奥野健男氏の著書の中で、

（前略）主婦の目を通すという、客観的な手法を用いているため、他の作家の文章のように、聖戦万歳、恐懼、感

激というような、後から読んで羞しくなるような戦争謳歌の調子は全くない。[1]

と、この作品と戦時体制の関係を規定し、その上に立って太宰の戦時下の執筆に対しても「一篇の戦争小説も、戦争礼讃の小説も書かず、また従軍作家にも、御用文学者にもならなかったのです」と総括している。それに対して赤木孝之氏は、奥野氏の評価を真向うから批判して、「十二月八日」を戦争賛美小説ととらえて次のように評価する。

これでも〈戦争謳歌の調子は全くない〉というのであろうか。昭和十七年の二月に発表されたこの作品が〈戦争批判の小説〉というのであろうか。（中略）「十二月八日」という小説は、〈戦争批判〉どころか、大東亜戦争開戦の日の昂ぶりを素直に、美知子夫人の言うところの〈大衆の中の一人〉（前掲書）としての感覚で書き上げた戦争文学なのである。[2]

このような「十二月八日」に対するまったく異なる評価は他の先行研究でもみられる。すなわち松本健一氏は『太宰治とその時代』の中で奥野健男氏の評価を継承するかのように、「かれにしてみれば自分の脚もとにもちょっと眼をやっただけのことである」[3]と、評価を最小限にとどめようとすることに対して、高木知子氏は「太宰治―抵抗か屈服か」の中で次のように反論している。

全体のトーンは、引用文のごとく、妻や近隣の者たちの戦争突入に対する心構えを表しており、まさしく、国策文学の典型ともいえる体裁を成しているのである。[4]

高木知子氏もこの作品を、赤木孝之氏の解釈と同様に「国策文学」として読み取っている。彼女の言う「国策文学」とは、戦争遂行が国家の政策として叫ばれた聖戦のプロパガンダを太宰のこの作品も担っているという意味だろう。

このような「十二月八日」に対する全く異なる解釈は何を意味しているのだろうか。これは「十二月八日」には、両方の解釈を可能にさせる二重構造が内包されていることに起因する。さらに「十二月八日」が戦時下の婦人雑誌『婦人公論』に発表されていたことも重要な鍵として浮かび上がる。それは昭和一五年以降、新聞・雑誌メディアに対する国家の統制が本格的に実行されるようになるからである。太宰が『婦人公論』に「十二月八日」を発表していた昭和一七年といえば、雑誌メディアに対する「用紙統制」という分量の制限だけではなく、「思想統制」という内容に対する検閲が一層厳しくなっていた。[5]したがってこの「十二月八日」を言及する際、掲載された婦人雑誌『婦人公論』との関連性に注目しなければならない。

それではこの「十二月八日」の内容を分析・検討しながら、そこに見られる二重構造をあきらかにすると同時に婦人雑誌『婦人公論』との関連性を追求してみたい。

二、「十二月八日」に見える戦争意識の両義性

二―一　国策小説的要素

「十二月八日」には赤木孝之と高木知子の両氏が主張しているいわゆる戦争文学的要素が作品の中に漂っていることがたしかに認められる。それは冒頭部の「大本営陸海軍部発表。帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり。」という太平洋戦争開始のラジオの放送を聞いた平凡な主婦の感想からも読みとれる。

しめ切つた雨戸のすきまから、まつくらな私の部屋に、光のさし込むやうに強くあざやかに聞こえた。二度、朗々と繰り返した。それを、ぢつと聞いてゐるうちに、私の人間は変つてしまつた。強い光線を受けて、からだが透明になるやうな感じ。あるひは、聖霊の息吹きを受けて、つめたい花びらをいちまい胸の中に宿したやうな気持ち。日本も、けさから、ちがふ日本になつたのだ。（『婦人公論』昭和一七年二月号一一一頁）

太平洋戦争の開戦を告げるラジオの放送を聞いた主婦の〈私〉が強い戦意高揚感をおぼえていることがわかる。この戦意高揚感は全身を「強い光線」が貫くように感じられ、まるで「聖霊の息吹き」を受けて、ある使命感を吹き込まれたかのようだった、とある。この引用からは、太平洋戦争遂行の国策をあたかも聖なる義務としてわが身に引き受けようとする主婦の高揚した意識が感じられる。その高揚感にうたれたまなざしは、「日本」もまた聖なる戦争を遂行する崇高な国家と映って、「日本も、けさから、ちがう日本になったのだ」という強い言葉として表れている。そのことは次の夫との会話からも読み取れる。

「日本は、本当に大丈夫でせうか。」と私が思はず言つたら、「大丈夫だから、やつたんぢやないか。かならず勝ちます。」と、よそゆきの言葉でお答へになつた。主人の言ふ事は、いつも嘘ばかりで、ちつともあてにならないけど、でも此のあらたまつた言葉一つは、固く信じようと思つた。（一一三頁）

主婦の「私」が日本国を信じようとする高揚した気持は、普段は信用できない夫の、この戦争は勝つという言葉だけは強く信じたく思う。そしてその気持はアメリカに対する強い敵愾心として表れている。

（前略）目色、毛色が違ふといふ事が、之程までに敵愾心を起こせるものか。滅茶苦茶に、ぶん殴りたい。支那を相手の時とは、まるで気持がちがふのだ。本当に、此の親しい美しい日本の土を、けだものみたいに無神経なアメリカの兵隊どもが、のそのそ歩き廻るなど、考へただけでも、たまらない。此の神聖な土を、一歩でも踏んだら、お前たちの足が腐るでせう。お前たちには、その資格が無いのです。日本の綺麗な兵隊さん、どうか、彼等を滅つちやくち

やに、やつつけて下さい。（一一三頁）

日本の国土と兵隊を神聖視し、アメリカの兵隊を獣に比喩するところには「鬼畜米英」という当時の米英軍を鬼畜化することで戦争を正当化させようとした標語が読み取れる。この標語が戦争を正当化するために当局が意図的に創りだした代表的な文句であることを考えると、この平凡な主婦の戦争に対する意識は、いわば国策的プロパガンダを素直に受け入れ、日本の勝利を強く祈願していると読まざるを得ない。この姿勢はたとえば「こんな辛い時勢に生まれて、などと悔やむ気がない。かへつて、かういふ世に生れて甲斐をさえ感ぜられる」とか、「マレー半島に奇襲上陸、香港攻撃、宣戦の大詔」をラジオが伝えるのを聞いて「涙が出て困つた」という気持の高揚による興奮状態につらなるものがある。そこには聖戦遂行という国是を素直に受け入れようとする〈私〉の姿勢が認められよう。

以上のような主婦の〈私〉の戦争に対する姿勢から考えると、赤木孝之氏と高木知子氏が主張する「戦争賛美小説」「国策文学」という評価は妥当だといわざるをえない。このようにこの「十二月八日」の中で、当局が日本国民に訴えていた戦意高揚意識が明確に読み取れるのは、戦時下の国策による雑誌メディアに対する言論統制と深い関係があると思われる。というのは戦時下の言論統制のために、日本の「情報局」は昭和一五年から「日本出版文化協会」を設立させたり、用紙の支配権を掌握するなど、図書雑誌の検閲や流通に対する統制を一層強化したからである。[6] このような戦時下の図書雑誌に対する統制は、雑誌の編集者や執筆者に大きな打撃を与えたことはいうまでもない。例えば、春山行夫は『文藝』（一九四〇年一一月号）[7]の中で、編集者の姿勢の転換を促している一文がある。

今日の雑誌ジャーナリズムに求められてゐるものは、この意味の転換の急速な促進であり、今後の編輯者に求められてゐるものは、商業主義機能の触手としての編輯者ではなく、時代のはげしい変化を正しく導いてゆく羅針盤たる雑誌の国家的、社会的機能を発揮するに足る責任者としての編輯者であり、その時代感覚と主知の正しさであるといつていゝ（後略）

「時代のはげしい変化」すなわち戦争という非常時代における雑誌ジャーナリストのありかたを提示している。このような雑誌メディアに対する干渉は編集者の姿勢にとどまらず、雑誌に掲載される創作欄にまで及んでいた。それは当時『婦人公論』や『中央公論』の編集を担当していた畑中茂雄氏の回想からもうかがえる。昭和一七年五月、「日本出版文化協会」から呼び出された畑中茂雄はその当時の記憶を次のように述べている。

（前略）とくに六月の創作欄についてかなりはっきりした見解をのべた。すなわち、同欄の野口冨士男「家系」のごとき純然たる私小説で、しかも個人的な愛情問題に今日もなおきょくせきしている。このジャンルの作品は創作欄からむしろさしひかえたほうがよくはないか、三月号は室生

犀星の「えにしあらば」と日比野士朗の「甥の立場」、四月号が中山義秀の「梅花」と宇野千代の「妻の手紙」、五月号が森三千代の「安南」と大田洋子の「花の子」、これでは、戦時下の小説欄としてふさわしいものがない。あなたには、こういう創作欄の傾向を、このさい改める気もちがないか、という調子であった。[8]

この引用からは、『中央公論』の小説欄に対する当局の「戦時下の小説欄としてふさわしいものがない」という不満とそれに対する改善の要求が見て取れる。これは当局の雑誌メディアに対する検閲の目が、小説欄の細かいところにまで及んでいたかを物語ってくれる。このような検閲が、同じ系列の『婦人公論』の小説欄にも及んでいたことは容易に想像できる。また「日本出版文化協会」による出版物に対する用紙の割当量を決定する「査定」の基準として「不要不急図書の抑制・戦意高揚出版物の推薦」という二点に焦点をおいたとされる。[9]この「査定」が戦時下の出版物の統制のおもな基準として作用していくのである。

この「十二月八日」が昭和一七年二月に『婦人公論』に掲載されたということは、当局の厳しい検閲を通過したということを語ってくれる。すなわち「十二月八日」の中に国策的プロパガンダをもとにした戦意高揚が明確に読み取れるのは、前掲した時局の状況との関連性を無視することはできないということである。これは太宰治という作家一人の問題ではなく、同時代を生きていた作家たちの宿命であったともいえよう。すなわち戦時下の雑誌メディアは国策のプロパガンダという新たな要素を強いられ、それはまた作家たちの創作にまで及ばざるを得なかったのである。

二―二　非国策小説的要素

しかしながら、前節で言及したように、この「十二月八日」には主婦の〈私〉の戦争に対するスタンスが一方的に自己意識を国家のプロパガンダに埋没させられているだけというわけではない。というのは、「十二月八日」には戦争による食糧難や物不足のような、主婦だからこそ感じられる戦時下の生活難やそれによる不安が繊細に描かれているからである。

それから郵便局に行き、「新潮」の原稿料六十五円を受け取つて、市場に行つてみた。相変らず、品が乏しい。やつぱり、また、烏賊と目刺を買ふより他は無い。烏賊二はい、四十銭。目刺し、二十銭。（中略）思い切つて私の履物を買ふ。こんなものにも、今月からは三円以上二割の税が附くといふ事、ちつとも知らなかつた。（一一四～一一五頁）

主婦が肌で感じる戦時下の生活の困難がなにげなく語られている。それに太平洋戦争の開戦の直前に設けられた税金が戦時下の日常生活に影響を与えていることが強い語調ではないが、さりげなく語られている。主婦の〈私〉のまなざしは夫を訪ねてきた男子学生の徴兵に対しても認められる。

堤さんも、めでたく卒業なさつて、徴兵検査を受けられ

たのださうだが、第三乙とやらで、残念でしたと言つて居られた。佐藤さんも、堤さんも、いままで髪を長く伸ばして居られたのに、綺麗さつぱりと坊主頭になつて、まあほんとに学生のお方も大変なのだ、と感慨が深かつた。（一一五頁）

とある叙述がそれであるが、注目されるのは、前掲の引用のような戦意高揚の意識よりは、学生の徴兵の大変さが控え目なかたちで綴られていることである。そして隣家の主人の場合、日頃の空襲対策の苦労を「敵前上陸に劣らぬ苦しみ」と、銃後の苦しみは前線と変わらないことを訴えている。

御主人は、ジャンパーなど召して、何やらいさましい恰好で玄関に出て来られたが、いままで縁の下に蓆を敷いて居られたのださうで、

「どうも、縁の下を這ひまはるのは敵前上陸に劣らぬ苦しみです。こんな汚い恰好で、失礼。」

とおつしやる。縁の下に蓆などを敷いて一体、どうなさるのだらう。いざ空襲といふ時、這ひ込まうといふのかしら。不思議だ。（一一四頁）

以上のような平凡な主婦が戦時下の日常生活から感じられる戦争への不安と戸惑いは、前掲した戦争小説的要素と並立しながら作品全体に流れている。それは末尾にある次の文章に集約されている。

銭湯へ行く時には、道も明るかつたのに、帰る時には、もう真つ暗だつた。燈火管制なのだ。もう之は、演習でないのだ。心の引きしまるのを覚える。でも、これは少し暗すぎるのではあるまいか。こんな暗い道、今まで歩いた事がない。一歩一歩、さぐるやうにして進んだけれど、道は遠いのだし、途方に暮れた。（一一六頁）

この結末の夕暮を描写する箇所は、冒頭部の〈私〉の戦争に対する思いとは対比されるように構成されている。すなわち冒頭部に点綴される「強い光線」といった光輝のイメージは、聖戦の開始をあたかも神の啓示として受け取る主婦の〈私〉の聖なる場と時とに参入する際の高揚感の表現であった。それを通して冒頭部には戦争への期待感や日本への信頼感があふれでているのだが、その気持は主婦の〈私〉の眼を通した日常生活への感慨を経て徐々に不安感を抱くようになっていく。冒頭部の「強い光線」「聖霊の息吹」という戦争を賛美する肯定的意識は「真っ暗」「暗い道」という暗闇のイメージで打ち消されることで否定的意識へと変わっていく。また「道は遠いのだし、途方に暮れた」という前途の広漠さは、聖戦遂行の前途に開かれる輝かしい未来への不安を表すことで、戦争による日本国民の不安感を代弁しているといえよう。

こうしてみると、確かに作品の冒頭には赤木孝之と高木知子の見解の通り、戦争小説的要素が読み取れるが、しかし主婦の戦時下の日常生活から感じられる困難さによって徐々に不安は

深まっていき、最後には戦争に対する意識の変化にまで及んでいる叙述からすると、果たして戦争小説・国策文学と断定することができるかどうかは危ぶまれる。

太宰が「十二月八日」に日常生活を中心に主婦の立場から太平洋戦争に対する意識を語らせたことは、『婦人公論』の購読者層を意識していたからであろう。戦時下の生活難や不安に対する繊細な描写は、『婦人公論』の女性読者層に共感をもたらしたにちがいない。それは「十二月八日」が掲載された『婦人公論』の目次をみると明らかになる。というのは同月号の特集記事として「決戦下の国民生活」というタイトルの下に〈生活線の切下げを急ぐ〉〈決戦生活下の家計〉〈生活切下げの為の食生活〉などの記事が並んでいるからである。戦時体制下に入ると、主に主婦読者を多く確保している『婦人公論』のような雑誌メディアには、戦時下の生活難を乗り越える日常生活上の対策が多く載せられていた。その中で芦澤千代が書いた「生活切下げの為の食生活」の記事をあげてみると、

事変はいよ〳〵前進し、長期戦は覚悟の事であります。人的資源はます〳〵戦線に生産工場に向けられ、物質は不足して国民の生活は窮屈なつて参ります。（中略）調理上、材料、調味料、燃料にも無駄をなくして時間に於ても手数に於ても節減して、食生活の切下げを断行することに、国民全体が協力しなければならない。（一七四頁）

と、戦時下の物不足の状態を食生活の切下げで乗り越えなければならないことを読者に訴えている。「十二月八日」に書かれている戦時下の物不足の状態や税金新設へのそれとない不満は、『婦人公論』の主婦読者が肌で感じていた現実である以上、共感をあたえていただろう。「十二月八日」にある語り手の〈私〉の目線を主婦層にあわせることで、『婦人公論』の主婦読者たちは〈私〉の心中に共有できたのではなかろうか。

このように「十二月八日」には、戦争小説的要素と戦時下の生活難や不安が同時進行の形で書き込まれている。このような「十二月八日」の両義性から考えると、「十二月八日」が戦争批判小説までにはいかないが、単なる戦争小説と断定することはできないと思うのである。

三、クローズアップされる母子の姿と『婦人公論』の意図

以上の節においてこの小説の二重構造を明らかにしながら、それを婦人雑誌『婦人公論』との関連性から論じてみた。これをふまえ、本節では、小説「十二月八日」の一つの特徴ともいえる母子の姿に観点を移して『婦人公論』との関係性をさらに具体的に考察してみることにしよう。

この「十二月八日」には、太宰の他作品ではめったに見られない「子供」の存在がクローズアップされている。「十二月八日」には、当時生まれたばかりの太宰の長女園子が実名で登場していて、園子を育てる場面が書き込まれている。戦時下の太宰の作品ではめったにみられない慈愛あふれる母親の姿と可愛らしい子供の描写に注目してみたいと思う。具体的にいえば、作品の後半になって園子をお湯にいれる時の楽しさや子供に対

する愛情が感じられる長い文章が記されている。

ああ、園子をお湯にいれるのが、私の生活で、一ばん一ばん楽しい時だ。園子は、お湯が好きで、お湯にいれると、とてもおとなしい。お湯の中では、手足をちぢこめ、抱いてゐる私の顔を、ぢつと見上げてゐる。ちよつと、不安なやうな気もするのだらう。よその人も、ご自分の赤ちやんが可愛くて可愛くて、たまらない様子で、お湯にいれる時は、みんなめいめいの赤ちやんに頬ずりしてゐる。園子のおなかには、ぶんまはしで画いたやうにまんまるで、ゴム鞠のやうに白く柔く、この中に小さい胃だの腸だのが、本当にちやんとそなはつてゐるのかしらと不思議な気さへする。そしてそのおなかの真ん中より少し下に梅の花の様なおへそが附いてゐる。足といひ、手といひ、その美しいこと、可愛いこと、どうしても夢中になつてしまふ。どんな着物を着せようが、裸身の可愛さには及ばない。お湯からあげて着物を着せる時には、とても惜しい気がする。もつと裸身を抱いてゐたい。（一一六頁）

この叙述はまるでボッティチェリの描く聖母子像のごとく、母親の慈愛と子供の純真無垢な愛らしさが素直な筆致で描かれている。それほどにこの母子の姿には時を越えた永遠性が醸し出されているように見える。日常生活の何気ない母子の姿、とりわけ幼児の姿から感じられる可愛らしさが『婦人公論』の婦人読者たちに母性本能を深くかき立てたのではなかろうか。

「私の生活で、一ばん一ばん楽しい時だ」という文章で感じられるように、いまの〈私〉には子供を育てるのが生活の中でもっとも生き甲斐のあることが強調されている。

ここで問題として取り上げたいのは、なぜ「十二月八日」には、これまでの太宰文学には見られない、このような子供を育てる姿やその楽しさが強調されて描かれているのかという疑問である。そこで重要な媒介として取り上げたいのは、『婦人公論』という雑誌メディアの存在である。『婦人公論』には、婦人読者のための育児関係の記事が多く見られるが、戦時下になると国家の「人口増加政策」に応じる記事の掲載が目立つようになる。

この「十二月八日」が掲載された二七巻二号（一九四二年二月）の『婦人公論』にも、「帝都女学生の母性指導」という特集が載せられている。その冒頭には、

決戦下の人口増加政策に即応して、生めよ、殖せよ、そして強く育てよ、と、東京市がやがては近き将来に母となるべき、女学校上級生徒を動員して、育児の実習訓練を行はせてゐる。

という書き出しとともに、熱心に育児の実習訓練に取り組んでいる女学生のグラビアが、五ページにわたって載せられている。（**図1**）この冒頭に書かれている「生めよ、殖せよ、そして強く育てよ」というスローガンは、戦争が本格化していくにつれて、人口の減少に対する「人口増加政策」の一環であったのである。一九四一年に国民優生連盟が発表した結婚相談所におけ

る結婚についての指導方針「結婚十訓」[10]の中にも「産めよ育てよ国の為」という訓戒が含まれていた。

一　一生の伴侶として信頼出来る人を選べ
二　心身共に健康な人を選べ
三　お互いに健康証明書を交換せよ
四　悪い遺伝のない人を選べ
五　近親結婚はなるべく避けよ
六　なるべく早く結婚せよ
七　迷信や因襲に捉はれるな
八　父母長上の意見を尊重せよ
九　式は質素に届けは当日
十　産めよ育てよ国の為

この「結婚十訓」について若桑みどり氏は「戦時下の母性対策」(『戦争がつくる女性像』筑摩書房、一九九五年九月)のなかで次のように述べている。

この項目には、一見して常識的な事柄が多いが、基本的にはナチスの人口政策と同様に、日本国民の血の純血と向上を目的としていること、また早婚による人口の増加を目指していること、家族制度の強化による結婚・性・出産の国家管理という意図は明白である。とりわけ、すべての目的は最後の一条に要約される。ここから「産めよ殖やせよ国の為」という有名な標語が生まれた。(七〇頁)

この言説からも、「産めよ育てよ国の為」というスローガンが、国粋的ナショナリズムの思想にもとづく戦争政策によるものであったことがわかる。このスローガンを『婦人公論』が特集のキャッチコピーに使用したということは、女性読者特に主婦読者を多く確保していた『婦人公論』のような雑誌メディアを通じて日本全国に広められていったということである。それはいうまでもなく、国策に協力せざるを得ない雑誌編集者の編集方針によるものであっただろう。このようなスローガンは(図2)のように商品広告にも利用されるようになった。この薬品の広告に、「丈夫に育て日本を強く」というキャッチコピーとともに、元気な赤ん坊と笑顔で見つめている母親の姿を取り入れたことからは、『婦人公論』の女性読者に商品広告の効果をアピールさせようとする意図が読み取れる。またこのような商品広告を通して「産めよ育てよ国の為」という政策が『婦人公論』の読者層に伝わる効果はあったといえよう。つまり政治性と商品広告が相俟って、国民の身近な人口増加政策の標語として定着していくのである。

『婦人公論』の「帝都女学生の母性指導」の特集とともに掲載されている太宰の「十二月八日」という短編小説の中で、「子供」を育てる主婦の姿が長文にわたって描かれていることは、「産めよ育てよ国の為」という人口増加政策と密接な関わりがあったと思われる。雑誌『婦人公論』の編集部は、その叙述に女性購読者の母性本能をかき立てる力のあることを認めたのではなかろうか。『婦人公論』の編集部が「十二月八日」の全体

的に流れている戦意高揚意識や不安感よりも、日常生活のなにげない母子の姿の描写をクローズアップさせようとする意図は、「十二月八日」の挿絵からもうかがえる。この（図3）のような赤ん坊をおんぶしている母親の挿絵は、「十二月八日」に描かれている母子の姿と相俟って、『婦人公論』の女性購読者の母性本能を刺激させる役割をはたしているといえよう。このような『婦人公論』の編集意図は、同月号の「女性提言」という意見欄に野上彌生子の〈ただ子供たちを〉という文章が掲載されていることからも察知できる。

> （前略）それについて婦人として、同時に母親としての私たちの関心はなにより子供に集まる。どんな事情のもとに於ても、子供たちだけは安全に健やかに、成長させ、教育しなければならない。（中略）私はたゞ叫びたい、子供たちを、たゞ子供たちを。（四二頁）

戦争という非常時の中、なによりも子供を大事にしようとする気持が読み取れる一文であるが、「十二月八日」の主婦の〈私〉の子供に対する心情に相通じるものが感じられる。

ともかくも、『婦人公論』は、この「十二月八日」に描かれている母子の姿の方が、「産めよ育てよ国の為」というスローガンを直接採り上げるより、『婦人公論』の読者層に母性本能を刺激する効果があると考えたのではなかろうか。筆者は、そこに太宰の小説が『婦人公論』に収載された大きな理由があるとみるものである。太宰が「十二月八日」の中で育児の姿をクローズアップさせたのは、『婦人公論』に強いられていた人口増加政策の影響が作家の創作にまで及んでいたことを物語ってくれる。それは戦時下という非常時を生きた同時代の作家たちには避けられない厳しい現実であったといえよう。

むすび

太宰治の短編小説「十二月八日」の中には、平凡な主婦の立場からみた戦意高揚の意識と戦争による生活難や不安という二つの要素が見事に描かれている。「十二月八日」に読み取れる戦争に対する国策的プロパガンダは、当時の文芸雑誌だけではなく、婦人雑誌メディアまで義務づけられていた「戦意昂揚意識」の表出であったといえる。本稿で論じた「十二月八日」で読み取れる戦争意識の両義性は、戦時下の太宰の他の雑誌における創作にもよくみられる。戦時下の雑誌界の状況を念頭に置きながら、太宰自分の戦争に対する意識が表れていることが、戦時下の雑誌メディアにおける太宰文学の特徴ともいえる。

そして「十二月八日」に母子の姿をクローズアップさせていることは、まだ太宰が新人作家の扱いをされていたこと、また『婦人公論』に初めての掲載であったことを考えると、雑誌メディアを作品と読者との媒体だという役割とともに『婦人公論』の「人口増加政策」の特集に相応するもう一つの役割を強いられていたともいえる。このような『婦人公論』の編集部の意図は、「十二月八日」の挿絵に母子の姿が強調されて描かれていることからも明確に読み取れる。したがって「十二月八日」の

中に母子の姿がクローズアップされていることは、『婦人公論』の編集意図が作用していたとみるものである。作家として作品を発表する場を提供してくれる雑誌メディアの存在を無視することはできない。特に戦時下という時代状況下では一層強化されることは避けられなかったのが事実であっただろう。

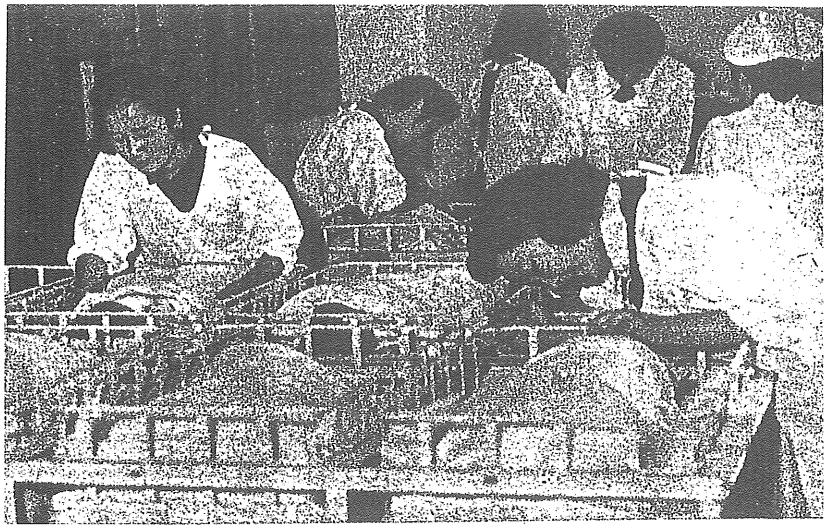
しかしそれと同時に「十二月八日」には家庭主婦だからこそ感じられる戦時下の生活の困難や不安が作品全般に流れていることは、文学作品を通して戦争の否定的な面を読者に伝えようとする意識を読みとらなければならない。小説「十二月八日」が婦人雑誌『婦人公論』に掲載する際、『婦人公論』の読者層と雑誌の編集方針の両方を念頭にいれて創作に取り組んだということは戦時期にみえる太宰文学の一つのスタンスであったといえる。

【注】

(1) 奥野健男『太宰治』、文芸春秋、一九七三年、二〇一頁。
(2) 赤木孝之『戦時下の太宰治』、武蔵野書房、一九九四年、三三頁。
(3) 松本健一『太宰治とその時代　含羞の人』、第三文明社、一九八二年、一三〇頁。
(4) 高木知子「太宰治―抵抗か屈服か」(『戦争と文学者』、三一書房、一九八三年)一七七頁。
(5) 畑中繁雄『覚書昭和出版弾圧小史』、図書新聞社、一九六五年、四〇頁。戦時下『婦人公論』『中央公論』の編集を担当していた畑中氏は著書の中で、「情報局は、当時の執筆者や編集者がかろうじてまもろうとした仕事のうえで良心と自由を剥奪していったばかりか、一歩をあやまれば、総動員法違反としてただちに投獄するという威嚇をもって言論界の全領域にたちふさがっていった。もちろん当初においてはなおいくぶんかの潜在的抵抗の意識もなくはなかったが、しかし昭和一五年、六年ごろにいたってはついに、銃剣と捕縄の脅威に、ただかたくなな沈黙を持するほかなかった。かくて、戦時下の出版ジャーナリズムは、その全機能を戦時支配に〝供出〟して、軍国主義における、まさに「紙の弾丸」に堕しさっていったのである」と、戦時下の厳しかった出版ジャーナリズムの状況を述べている。
(6) 紅野謙介『書物の近代』、筑摩書房、一九九二年、二二八頁。「出版新体制」の中で、「(出版文化協会)とは、「用紙を一般出版業者に対し文化的見地から実情に即し合理的に割当する」こと、「文化的使命を積極的に担当せしむること」、「現在の書籍雑誌配給機構の欠陥を是正し円滑なる配給を行ふ」こと、「官庁との連絡を緊密ならしむること」、の四つの目的を掲げ、用紙を押さえた上で政府主導による出版新体制を進めんとする統制組織にほかない。」と、「出版文化協会」の出版に関する統制への強化をまとめている。
(7) 『雑誌年鑑　昭和十五年』、日本読書新聞社雑誌年鑑編纂部編輯、大空社、一九八八、参照。
(8) 畑中繁雄『覚書昭和出版弾圧小史』、図書新聞社、一九六五年、四二頁。
(9) 注(8)参照、四三頁。
(10) 若桑みどり『戦争がつくる女性像』、筑摩書房、一九九五年、六九頁参照。

(イ　ヒョンジュ　筑波大学大学院博士課程
文芸・言語研究科　文学)

図1　『婦人公論』一九四二年二月号



帝都女學生の母性指導

決戦下の人口増加政策に即應して〝生めよ、殖せよ、そして強く育てよ〟と、東京市がやがては近き將來に母となるべき、女學校上級生徒を動員して、育兒の實習訓練を行はせてゐる。市の厚生施設である産院、乳兒院を利用して、交互に一週間宛の勤労作業をさせ、この短い期間内に先づ産褥から分娩、産褥中に於ける一通りの知識を與へ、更に日本に多い

図2 『婦人公論』一九四二年二月号

丈夫に育てて日本を強く

戰線に活躍する强い兵士／銃後を護る健康な國民／
一も健康／二も健康／祖國を護る武器は先づ健康／

さあ皆さん元氣で御奉公致しませう！

『さあ見てやつて下さい、坊やの萬歳を……』丸々と肥つたお手々を擧げた可愛い未來の英雄を抱き上げたお母さんの朗かな笑ひ聲が大空に響きます。

全國の村々に、町々に、こんなに立派な第二國民が滿ちて居てこそ日本は强大になるのです。

ところが、此の際不幸にも心臟や胸、胃腸等が弱い爲に思ふ樣に御奉公の出來ない方には身體を芯から力づける動物ホルモン藥をお奬めしますが

それには、動物ホルモン藥中でも特に優れた麝香や犀角、其他數種の成分を配伍した『救心』と云ふ强壯藥の効目が評判です。

『救心』は二圓、三圓五十錢、五圓で全國の藥店にありますが、本舗では『心臟の手當法』と云ふ美本と、『救心』二日分を進呈中ですから、御希望の方は東京市京橋區西八丁堀二丁目十七ノ十四救心本舗へハガキで申込みになるとよい。

図3 『婦人公論』一九四二年二月号

十二月八日

太宰治

深澤紅子畫

けふの日記は特別に、ていねいに書いて置きませう。昭和十六年の十二月八日には日本のまづしい家庭の主婦は、どんな一日を送つたか、ちよつと書いて置きませう。もう百年ほど經つて日本が紀元二千七百年の美しいお祝ひをしてゐる頃に、私の此の日記帳が、どこかの土藏の隅から發見せられて、百年前の大事な日に、わが日本の主婦が、こんな生活をしてゐたといふ事がわかつたら、すこしは歷史の參考になるかも知れない。だから文章はたいへん下手でも、噓だけは書かないやうに氣を附ける事だ。なにせ紀元二千七百年を考慮にいれて書かなければならぬのだから、たいへんだ。でも、あんまり固くならない事にしよう。主人の批評に依れば、私の手紙やら日記やらの文章は、たゞ眞面目なばかりで、さうして感覺はひどく鈍いさうだ。センチメントといふものが、まるで無いので、文章がちつとも美しくないさうだ。本當に私は、幼少の頃から禮儀にばかりこだはつて、心はそんなに眞面目でもないのだけれど、なんだかぎくしやくして、無邪氣にはしやいで甘える事も出來ず、損ばかりしてゐる。慾が深すぎるせゐかも知れない。なほよく、反省をして見ませう。紀元二千七百年といへば、すぐに思ひ出す事がある。なんだか馬鹿らしくて、をが